教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　宇賀神　貴
編集広報部

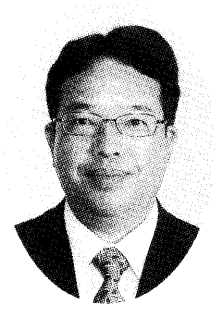
もくじ

◎あいさつ …… 1
◎県の動き　総会・講演会 …… 2・3
◎全国研究大会 …… 4・5
◎特色ある学校 …… 6
◎地区だより …… 7
◎ひろば …… 8

会長あいさつ

お接待の心

宇都宮市立泉が丘中学校　宇賀神　貴



「北の大地のこころ ～広さと温もり そして力強さ～ 」のメッセージを掲げ、全国公立学校教頭会研究大会旭川大会が約3,000名の副校長・教頭先生方の参加をもって、7月28日から30日の3日間にわたり盛大に開催された。メッセージに「温もり」という言葉が入っているが、運営された北海道の先生方の姿にもそれを感じさせる場面が多くあった。1日目の全体会の受付開始1時間前には、ほとんどの方がスタンバイされていた。2日目の朝は、あいにくの雨の中、要所要所に看板を持たれて道案内をされていた。おそらく1時間は立たれていたことだろう。また、教育懇談会のテーブルには、透かし切りのついた名札が蝶々の形をした手作りの切り紙の台座にそっと添えられていた。約200人分、しかもテーブルごとに色違いで。参加した方々が相当の時間をかけて作られたのだろうと口々に話されていた。

一昨年度に愛媛大会が行われた際に四国の方々が皆さん「お接待の心で」と言われていた。「お接待」とは、ご案内のとおり、「遠路はるばる巡拝されるお遍路さんたちへお茶を出したり、話し相手になったりして、その労をねぎらうこと」である。この風習が今日まで脈々と受け継がれており、それはお遍路さんに対してだけではなく、自然に道案内をされるなど、来県される方に対しても行われている。また行ってみたいと思うのはそのせいもあるかもしれない。似たような言葉で、関東では、「おもてなしの心」という言葉がある。相手に対する気遣いを意味している。今の子どもたちに付けさせたいものの一つとして「人間関係力」があちらこちらで示されている。内容としては、コミュニケーション能力や社会的スキルなどが挙げられることが多いが、「お接待の心」や「おもてなしの心」もあってよいのではないかと考える。

私たち栃木県公立小中学校教頭会は、本年11月に宇都宮市において関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会栃木大会を開催する。関東各都県から約1,000名の会員の皆様をお迎えすることになる。本大会により研究が深まり、明日への針路が明確になることはもちろんのこと、本県会員一人一人が「お接待の心」や「おもてなしの心」をもって積極的に大会運営にあたることにより、本県会員の副校長・教頭先生方が開催してよかった、関東各都県の副校長・教頭先生方が参加してよかったと言える大会にしたい。

――県教頭会の動き――

定期総会

「第48回定期総会並びに研修会」を盛大に開催

日　時　平成22年5月24日(月)　13：00～
会　場　宇都宮市文化会館小ホール

平成22年度の定期総会並びに研修会が、5月24日に宇都宮市文化会館小ホールで開催されました。

定期総会では、国歌斉唱、平成22年度役員報告、会長あいさつ、来賓あいさつ等に続き、議長団が選出され、平成21年度の事業報告、会計決算報告・会計監査報告がなされました。また、平成22年度の活動方針案・事業計画案・予算案等の提案があり、慎重審議の結果、いずれも満場一致で承認されました。その後、県教頭会本部役員として活躍された方々を代表して、前副会長の山崎久美子様に感謝状並びに記念品が贈呈されました。

後半の研修会においては、講師に東京大学大学院准教授の勝野正章氏をお迎えし、演題「豊かな人間性と創造性を育む学校運営と教頭・副校長の役割」について講演会が行われました。人と人をつなぐマネジメントの重要性や、複数の教職員による層としてのリーダーシップにより教職員の同僚性が構築されることなど、数多くの示唆に富んだ講演でした。

講演会

「豊かな人間性と創造力を育む学校運営と教頭・副校長の役割」

東京大学大学院教育学研究科　准教授　勝　野　正　章　氏

日本の学校教育の質の高さを支えているのは、学校が、教職員の先生方が、世界のどの国に比べてもより以上に頑張っているから、努力をしているから、これにつきてしまうのです。それは先生方一人一人が熱心に働いているということも一つあります。もう一つ、先生同士でお互いに授業の研究をし合う、学び合う「授業研究」が学校の質を高めていく秘訣なのだと考えられています。

ところが、「同僚性」と呼んでもいい先生方の仕事の仕方や学び方が、今、実はかなり危機的な状況に直面しているのも事実です。一つは、高齢化・年齢構成のアンバランスがあります。また、非常勤の先生方が増えています。病気休職者の先生が増えています。これまでの日本の学校の公教育の質を支えてきた学校のイメージ、学校運営のイメージ、教職員のつながり方や仕事の仕方の実態が、もしかするとこれから大きく変わっていくかもしれない状況に現実としてあるということです。

そうした中で今、学校運営の大きな課題として何があるか。それは組織全体としての活力をどう維持していくかということになりますし、また、教職員がばらばらではなく、まさに日本の学校教育の質を支えてきた共同の仕事の仕方、「同僚性」と言われるものをどう維持していくかが大きな課題としてあると思います。

もう一つ、格差社会の中に学校が存在しているという事実は大きい。全国学力学習状況調査をさまざまな形で分析し、その結果、子どもたちの家庭の経済的な環境、教育的な環境とその子どもの成績の格差が見事に相関する状況にあります。

ここで一つの調査の結果を報告したいと思います。一つの学校のタイプが見えてきます。目標が共有されて、先生方が協力関係にあり、子どもたちのことが常に話題にされ、忙しいけれども子どものことを中心に

置いて頑張っている学校「同僚性のある学校」「目標共有協力型」という言い方をしてもいいと思います。

2番目はその逆のタイプになるのだと思いますが、お互いにどんな授業や指導をしているか知らずにばらばらに行われている。「仕事の忙しさに対する不満が多い」「管理職の経営方針に対する不満も多い」「子どものことは話題にされない」「孤立葛藤型」です。

3番目は目標が共有されているけれども、どうも目に見える成果ばかり追ってしまう「成果主義目標共有型」といわれる学校です。実はそこには、子どもを丸ごと見ていくとか、子どもの今の発達の課題に真剣に向き合おうという感覚はあまりない。「エセ同僚性」とそれを呼びました。

学校運営の課題を考えてみると、どうすれば先ほど挙げた3つの類型の「孤立葛藤型」と言われる学校や、「成果主義目標共有型」の学校を、本当の意味で同僚性豊かな目標共有協力型の学校に変えていくことができるのか、これが学校運営の課題です。

もう一つは、特にこれから教師を目指していく人たちや実際に教職に就いている人たちにとって、どうすれば教職を本当にやりがいのある仕事にできるか。ただやりがいがあるだけでなく、公共的なある種の使命感や専門職としての公共性のようなものを維持しながら、やりがいということをしっかり感じられる仕事にしていけるかどうか、ということだと思います。

佐藤学先生は、教職の公共性を「すべての子どもたちに学びの平等な機会を提供し、子どもたち一人一人が主人公として、政治と経済と文化の活動に参加する基礎となる市民的教養を教育し、民主主義社会の実現と発展に貢献すること」と定義しています。もともと学校の仕事というのは公共的なものです。教育方法にも「公共性」ということがしっかりとうたわれています。

子どもたちの文化的な家庭的背景では不利ですが、それを乗り越えて子どもたちに学力を付けさせている学校、これを「力のある学校」と私たちは呼びます。分からない時に「分からない」と言える学習集団づくり、授業と家庭学習、授業と家庭とのしっかりしたコミュニケーション、そのコミュニケーションに基づいて学校で行う学びと家庭で行う学びがしっかりリンクしていく。それから、弾力的な指導体制、多用な授業形態。子どもたちの学力をしっかり把握していく。そして、学習内容の定着を図る補充学習、動機づけを図る総合学習の推進。力のある学校を探して見ていくと、こういう特徴があることが明らかになりました。

今度は学校運営という面で見たときに、「力のある学校」は共通してリーダーがたくさん存在するということが明らかになっています。「教職員の同僚性」と言い換えてもいいわけです。学校運営の課題は、「結びつける」ということです。学校と家庭を結びつける、学校と地域を結びつける、学校の中では、教職員同士を結びつけることが非常に大事になっているということです。先生方の多忙化で本当に忙しいけれども、しかしそこに不満がない、やる気になれるかどうかは、その頑張りを支え認めてくれる同僚がいるから、管理職の先生や校長や教頭の先生がいるから、これなんです。

最後に、こうした学校運営の課題を踏まえて、教頭先生や副校長先生がどんな役割を担うことが求められているかという話です。よく学校経営や学校運営では「人・金・物のマネジメント」ということが言われます。同時に今大事なのは「知のマネジメント」です。先生方が共同で新しい知をつくりだしていけるかどうかが非常に大事で、先ほどご紹介した佐藤学先生は「学びの共同体」という言い方をしています。

先生方が学び合う、こうした学校だと、子どもたちもやはり学び合う、これは事実だと思います。しかもそのときは、社会的に貢献していく知、つまり「社会的な知」であるということができます。それが今度の教育基本法や学習指導要領の中に盛り込まれている「豊かな人間性」や「創造性」につながっていく知のあり方になります。特に教頭先生や副校長先生は「知のマネジメント」に役割をもっています。もっと簡単に言えば、学校の中で先生方をつなぐマネジメントです。そして、家庭と学校の先生方をつなぐ意味でも、人と人をつなぐマネジメントだということです。人と人とをつなぐことによって学校にいろいろなリーダーをつくり出すことができます。「層としてのリーダーシップ」がある学校は本当に強い学校、力のある学校です。こういったリーダーシップをつくり出すことができるのも教頭先生や副校長先生の大きな仕事だろうと思います。一人一人の教職員の健康、学び、研修に本当に気を配って仕事をなさることは大事だと思いますが、同時に先生方ご自身のお身体のことを私は心配します。是非健康ということにも留意され、人と人をつなぐマネジメント、運営ができるようお祈りして話を終えたいと思います。

最後までご静聴いただきまして本当にありがとうございました。

第52回全国公立学校教頭会研究大会（旭川大会）

開会式・シンポジウム

「北の大地のこころ」～広さと温もり そして力強さ～

真岡市立久下田小学校　小　林　律　子

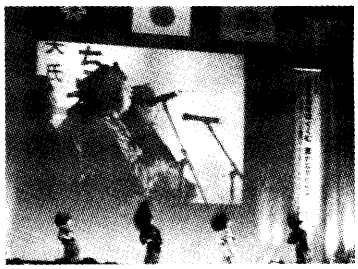
古谷雅幸大会実行委員長あいさつ

東北・北海道第３の都市旭川市の大雪アリーナに全国から3,000余名の参加者が集い、全公教研究大会が開催されました。

初日は、開会行事と郷土文化の紹介があり、中・高校生の吹奏楽演奏と旭川チカップニアイヌ民族文化保存会によるアイヌ古式舞踊の紹介がありました。アイスホッケーを行うアリーナは、空調は効いているのでしょうが参加者の熱気で扇子で扇がなくてはいられない暑さでした。開会行事に、特設のステージには来賓の方々が大勢みえていましたが、例年にも増してほとんどが代理の方でちょっと残念に思いました。

初日後半のシンポジウムは、北海道日本ハムファイターズの藤井純一代表取締役社長や、札幌交響楽団コンサートマスターの大平まゆみ氏など３人のシンポジストを迎え、それぞれの立場や経験から、ビジョンを共有していることがチーム力を発揮するために大切であることや、子どもにコミュニケーション能力を育てることの大切さなど示唆に富むお話をいただきました。

また、サプライズで、最後に大平氏からバイオリンの生演奏のプレゼントがあり、暑さも忘れるその艶やかな音色に、参加者一同魅了されました。


アイヌ古式舞踊

記念講演

北の大地でたくましく生きる動物たち

宇都宮市立宝木中学校　池　田　昌　司

今を時めく旭山動物園、その独創的な行動展示のコンセプトに世界中からの来園者が後を絶たない。そうした北の大地の動物園を入場者数日本一へと変えた前園長小菅正夫氏の情熱に満ちた90分間の記念講演が、会場大雪アリーナに響き渡った。

「動物園に入るのは全て偶然でした」と氏は語り始める。柔道などをやっていた学生時代、浪人もし、単位も落とし、卒業式の当日にやっと受けた旭山動物園も受験したのは氏一人だけ。翌日には受験番号№１への合格通知が届き、氏の動物園人生の闘いがスタートする。

「動物の姿・形は偶然ではない。その姿でなければ生きていけない」と動物を語る。生きていくために有利な形や能力を進化の過程で獲得し、その能力ははるかに人間を超えている。生息地の環境に適応した動物たちは、それぞれがその能力において№１であり、№２ではとうてい生きていけないという。動物たちの多様な姿・形は、えさを捕り、それを食べ、子孫を殖やして生き抜くための結果である。われわれは髪の色や服装の違いなど多様性として個性をとらえがちであるが、それぞれが目的を持ちいかに生きていくかという主体性の違いこそ真の個性として認め、育みたいものである。

講演後、旭山動物園を訪れる機会を得た。なだらかな丘に沿って動物たちの能力が十分に発揮できる世界が存在した。小菅氏の生きた場所であり、幾多の試練をくぐりぬけてきた地である。その人生は偶然ではなく、必然であろう。風に乗り、風に耐え、悠久のときをさわやかに生きる動物のように…。